

12.学生の課外活動

1)ボランティア活動への支援

高知県立大学看護学部では、教員と学生が積極的に地域社会のボランティア活動に参加している。学生のボランティア活動を支援・促進し、人間や社会への関心を高め、さらに主体性の育成を支援するため、教員2名がボランティア委員として活動している。ボランティア委員は、ボランティアを募集する機関・団体と学内教員との橋渡しや、高知医療センターとの活動調整を行っている。

今年度も COVID-19 の感染拡大の影響により学外でのボランティア活動についても中止を余儀なくされたが、ボランティア活動再開に向けて車いすを使用する人への介助の仕方や視覚障がいをもつ人へのガイドの方法などを、学内のラーニングマネジメントシステム moodle を用いて学習する機会を設けた。以下、本年度のボランティア活動への支援について報告する。

(1) ボランティア活動に参加する前の学生への支援

①学内ボランティアオリエンテーション（4月に実施：1回生83名参加）

- ・看護学部が行っているボランティア活動について紹介した。前年度も COVID-19 の感染拡大の影響によりボランティアは実施できておらず、先輩等から話を聞く機会も少ないことから、過去にボランティア活動に参加した学生の声を紹介することで、学生のボランティア活動に対する興味関心を高められるよう構成した。

②moodle を用いた学習支援（3月8日現在、1回生60名が登録）

- ・資料として、ボランティア活動について、ボランティアガイダンス資料、車いすの移乗・移送に関する資料と動画、視覚障がい者の歩行介助に関する資料などを掲載した。
- ・車いすの実技演習や視覚障がいをもつ人へのガイドの演習については希望者に対して行うこととし、希望者は随時募集することとした。

②ボランティア活動支援の評価

- ・moodle を用いた学習支援を行うことにより、学習者がいつでも自分の時間の中で学習することが可能となるよう環境を整えることはできた。しかし、学習者がシステムに登録することが前提であり、登録の呼びかけは何度も繰り返し行ったが、全員の登録には至らなかった。また、実技演習の申し出は学習者にゆだねられており、実際に実技演習を希望した者はいなかった。今後は学習者の主体性を高めるような仕掛けづくりが必要であり、次年度の課題としたい。

(2) 高知医療センターでの活動

高知医療センターの病院ボランティア「ハーモニーこうち」への参加は、今年度も COVID-19 感染拡大の影響により、ボランティア活動が中止となっている。次年度以降、感染状況や感染症対策指針の変更等に合わせて、学生が主体的にボランティア活動に参加できるように支援を継続する。

2)地域における活動

看護学部の学生が、他学部と共に地域において活動するサークルについて、今年度の具体的な取り組みを以下に報告する。

(1) 手話サークル

手話サークルは、令和2年に立ち上げ今年で3年目となる。現在、看護学部1回生3名、2回生1名、3回生7名、社会福祉学部1回生13名、2回生4名、3回生2名の計30名で活動している。本年度は以下の5つの活動を実施した。

1：「聴覚障がい者・手話の歴史・法律」を5回実施。

手話は、聴覚障がい者のいる家族の中での使われていたホームサインから言語的コミュニケーションとして手話が作り挙げられてきた。しかし、そこに至るまでの歴史には、手話を禁止する出来事がおこ

るなどの苦勞があったことを知ることができた。法律としては、2006年の国連総会において「手話は言語である」と定義されたことで、日本でも、手話言語法制定に先立ち、「手話言語条例」が全国的に広がり、手話の権利保障を求めて活動をしていることが理解できた。

2: 「日常生活でよく使う手話・医療の現場で必要となる手話の実技」を12回実施。

日常生活だけではなく、今後病院での実習や臨床に役立つことが出来る手話を学び、聴覚障がい者が安心して治療、療養できる環境を整えることにつながっていくと考えられる。そのためにも継続して手話の実践を学んでいくことが必要であることが学べた。

3: 高知県立大学・国際医療福祉大学・東北福祉大学の3大学合同ワークショップ

「手話をより身近に感じ理解を深めよう」をテーマに手話の歴史から手話の文法・実技について学ぶことで、手話の楽しさを再確認し、今後も学び続けたいという意欲を向上させることを目的として開催した。手話の歴史から聴覚障がい者の理解を深めることができた。また、手話の文法や実技では、手話の文法を意識して手話を表現することを学び合い、他大学の学生と交流を深めることができた。

4: 第24回日本災害看護学会年次大会における学生交流集会「学生×防災・災害×〇〇」の主催

全国学会である日本災害看護学会第24回年次大会（本学主催、WEB開催）において、基礎教育に在学中の学生が主催する初の交流集会を、SIT、イケあいのメンバーと共に主催した。災害時における聴覚障がい者に対してどのような支援が必要であり、そのためにどのように学生がサークル内で活動しているのか報告することができた。また、他の防災・災害に関連した活動を行っている学生サークルの報告を聞き、今後は相互的に関わりながら支援していくことの必要性を学ぶことにつながった。

5: おうちで健康長寿体験型セミナー「災害が起きた時～聴覚障がい者への支援～」YouTubeを公開。

「手話」とは何かという基本から始まり、災害時に聴覚障がい者がどのような場面で困り、支援を必要としているのか。また、周囲にいる人たちが聴覚障がい者にできることは何かについて3回シリーズで解説をしたYouTubeを公開した。このYouTubeでは、津波発生時の避難の誘導方法や避難所でのアナウンスの通訳など手話を用いながら説明をしている。また、手話ができなくても聴覚障がい者に対応できる方法も説明しており、地域社会みんなで支援していくことができることを伝えることができた。

(2) 室戸ボランティアリーダー

2021年より本学のサークル団体として登録された室戸ボランティアリーダーは、県内の「国立室戸青少年自然の家」や「高知県立青少年センター」にて教育事業に参加する子どもたちのキャンプや自然体験のサポートを行っている。今年度も、リーダートレーニングの企画運営、レクリエーションや実際に行われる体験プログラムを学び、「子どもたちのためにどうすれば良いか」を考え、学生同士で相談し合いながらサークル活動に取り組んでいた。コロナ禍のなかで、オンラインイベントによる学生同士の交流会、リーダー養成講座の企画や開催がほとんどであり、参加者を対象としたボランティア活動は少なかった。しかし、制限が緩和された期間に、自主企画を計画し、オリジナルで考えた「遊び」を工夫し提供するなど、子どもたちが安心・安全に活動できるような地域での取り組みへの貢献をおこなっていた。

これらの活動が認められ、今年度サークル活動の中心的役割を担う看護学部の学生が、令和4年度国立青少年教育振興機構法人ボランティア表彰を受賞した。4年間、講義、実習、研究等と両立しながら、室戸ボランティアリーダーとして積極的に活動し、地域の子どもたちと関係性を築いたことへの功績が評価された。

今後も、看護学部では、課外活動において報告や相談を受けながら、支援を継続していく。

(3) SIT（高知県立大学災害看護学生チーム）

2021年3月に発足して以来、代表グループは2期目に入り、令和4年度も社会福祉学部の学生数名を含む31人で活動を続けてきた。主には2回生が中心に講師を務め、月2回の勉強会を開催している。医療トリアージ、CSCATTT、避難所運営といった災害時医療に関する基礎知識を学びあっている。メンバーの一部は日本DMAS（日本災害医学会学生部会）にも所属し、そこで学んだ知識を伝達講習なども行

っている。秋には一部で再開された医療機関のトリアージ訓練に、模擬患者役で参加し、学びを深めた。

日本災害看護学会第24回年次大会では、前述の手話サークル、イケあい地域災害学生ボランティアセンターのメンバーと一緒に学生交流集会のセッションを行った。WEB開催であったため、自分たちの考える、学生の頃から災害医療・看護を学び、活動することの意義について発信した他、日本DMASを含む全国の学生災害サークルのいくつかに声をかけ、活動の紹介動画を合わせて発信した。

11月の大学祭では、2年ぶりに学外の参加者も自由に見学できることとなり、クイズを解きながら楽しく災害が学べるSITのコーナーは大盛況であった。大学生だけでなく看護学や災害看護に興味を持った高校生たちも多くコーナーを訪れ、災害看護のことや大学生活のことなどについて案内役の先輩たちにたくさん質問していた。

(4) イケあい地域災害学生ボランティアセンター

2011年に4学部合同のサークル活動として発足して以来、一時は4学部あわせて80人を超えていた本サークルであったが、コロナ禍以後、実際の被災地支援や地域住民との交流活動ができなくなり、メンバーを急速に激減させていた。代表は3年間社会福祉学部が続いた後、健康栄養学部に移り、令和4年度は看護学部が代表を担った。令和4年度も引き続き学外の催しに参加することはできなかったが、学内における学生同士の集会は緩和されていたこともあり、本サークル活動の原点に戻る勉強会を中心に活動を行った。災害時の避難所について、国内で発生した過去のいくつかの自然災害について、災害ボランティアセンターの立ち上げや災害ボランティアセンターの運営について、などである。

また、長年の活動物品がそのまま山積みされていた部室の片付けを行い、過去に先輩たちが作成した防災クイズのGoodsや物品を使用できるよう整備するなど、活動が今後につながる、地道な準備の1年としていた。誰かに頼まれたことを行い感謝されることがボランティアではなく、今自分たちにできることを探して、誰かのためになることをする、そんな地道な活動を行った1年であった。

また前述の手話サークル、SITのメンバーと協力し、日本災害看護学会第24回年次大会で、初となる学生による交流集会の企画を行った。1時間のセッション時間の後半は、他大学の学生による活動紹介の動画リレーであったが、イケあいが以前から交流を持っていた、高知大学や高知工科大学の学生防災サークル、そして代表が個人で参加した全国の学生との交流会で知り合った岩手県立大学のサークルに声をかけ、紹介動画を作成した。地道だが豊かな実りを結んだ1年であったと思いつつ、見守った。